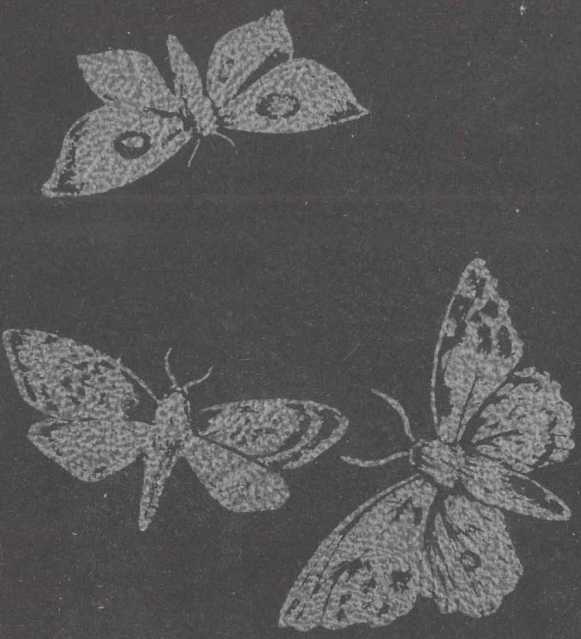

仮面舞踏会

横溝正史

仮面舞踏会

横溝正史

講談社

仮面舞踏会　（新版横溝正史全集17）

第1刷発行　昭和51年2月20日
第3刷発行　昭和51年5月28日
著　者　横溝正史（よこみぞせいし）
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京（03）945―1111（大代表）
振替　東京3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 1976 SEISHI YOKOMIZO

定価はカバーに表示してあります。　（文2）

仮面舞踏会　目次

プロローグ 9
第一章 大貴族の朝の食卓 15
第二章 役者は揃っていた 27
第三章 考古学者 37
第四章 女と考古学 45
第五章 マッチのパズル 53
第六章 蛾の紋章 70
第七章 楔形文字 85

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

第八章　箱根細工　99
第九章　A＋Q≠B＋P　107
第十章　祖母と孫　118
第十一章　師弟関係　128
第十二章　考古学問答　142
第十三章　目撃者　154
第十四章　青酸加里　162
第十五章　操夫人の推理　171
第十六章　万山荘の人びと　181

第十七章　下司（げし）のカングリ　191
第十八章　誰が青酸加里を持っているか　199
第十九章　佐助という名のピエロ　207
第二十章　グリーンは知っていた　216
第二十一章　霧海　228
第二十二章　ライター　238
第二十三章　もうひとりの女　251
第二十四章　操夫人の冒険　259
第二十五章　尾行　268

第二十六章　悪夢　280
第二十七章　崖の上下　291
第二十八章　信楽（しがらき）の茶碗　301
エピローグ　309

装画　篠原勝之
装幀　熊谷博人

仮面舞踏会

つねにわが側なる江戸川乱歩に捧ぐ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

プロローグ

泉の里からゆっくり登って半時間、土地の人がニドアゲとよんでいるあたりを過ぎると、しだいに眺望が広くなる。

よく晴れていた。

ちょうどみやげ物屋の店頭で売っている絵葉書のカラー写真みたいに、一文字山や鼻曲山(はなまがりやま)が旧軽井沢の町越しに、うすいセピア色となってひとあしごとにせりあがってくる。

「どう、ここらでひとやすみする?」

「浅間はまだ見えないの」

「浅間は頂上までいかなきゃ見えないさ」

「休んでもいいけど、だれかきやアしないかしら」

「きたっていいさ、かまうもんか」

あたりは雑木をまじえた赤松林だ。下草のなかにクズとウドが大聚落をなしている。ウドの白い花にまじって、クズの花の紫が眼にしみるように鮮烈である。女は路からすこしはいった林のなかにビニールの風呂敷をひろげた。路に背をむけて腰をおろすと、

「やあ、たいへんなひっかき傷をこさえたな」

「着ると暑いし、脱ぐとこれだし、たいへんな路、もっと楽な路なかったのかしら」

「ゼイタクいっちゃいけねえ。天国へ登るのに楽な路なんてあってたまるもんか」

男は投げだすようにいい、ゴロリと仰向けにねころんだ。ビニールの風呂敷のしたで下草がぐしゃっとひしゃげ、男の体はクズの葉のなかにめりこんだ。女は汗をぬぐうと悲しそうに両腕のひっかき傷をいたわっている。

路というものは使わないと荒廃する。以前はこの路も自動車が通れるほどだったが、戦争中から戦後へかけて、まったく手入れがいきとどかないままにすっかり荒れ果ててしまった。ふたり並んでやっと歩けるその路の両側から、いちめんに灌木がはみ出していて、半袖のブラウスだけだとこんなめにあう。と、いってカーディガンをひっかけていると、まうえから照りつける日の光に容赦はなかった。

路そのものもひどい。二三日まえに豪雨があったらしく、そうでなくとも浅間の焼け石のゴロゴロした路が葉脈のようにえぐられている。ところどころに露出した、むかしの浅間の大噴火の名残りらしい大きな角石が、けわしい路をいっそう険阻なものにしていた。

女は靴をぬいで、爪先をいたわっている。ナイロンの靴下を、すけてみえる爪先の畸型が、この女の昔の職業

を物語っているようだ。
「信ちゃん、水、くんない」
男は寝ころんだまま面倒くさそうに水筒をとって渡した。女はひとくちノドをうるおすと、
「あんた、どうお？」
「おれはいらん」
ニベもなくいってから思いなおしたように、
「じゃ、まあ、いっぱいもらおうか」
男は寝ころんだまま女の差し出す水筒のコップに口をやったが、半分以上はジーパンのうえにこぼしてしまった。
「やだわ。横着するからよ。もう一杯どう？」
「いらん」
男は頭のしたに両手をくんだまま、また草の底に身をしずめた。女にはそれがふてくされているようにみえて辛いのだ。なにかいいたいのだけれど、いうといっそう辛くなりそうなので、だまって水筒の栓をしめている。
男は二十三四か五六という年頃である。女より二つ三つ年少らしい。あるいはもっとちがっているのかもしれぬ。女のほうは顔色の悪さに反比例して、唇のふしぜんに赤いのはルージュのせいばかりではないらしい。胸のうすさや息切れのひどさからみて胸部に疾患があるらしく、それだけふけて見える。
小宮ユキも数年まえ歌劇団へはいったころは、だいそれた夢をもっていた。その夢がむざんに砕け散ったときはみじめだった。ちょっと顔が小ぎれいだというくらいでは、とうていこの世界でぬきんでていくことはむつかしい。歌手としても、踊り子としても、また演技者としても、素質にかけているのだという自覚をもたされたとき、ユキは絶望にうちひしがれた。それでも家庭の事情ではたらかねばならないユキは、もっと安直に収入をうる手段に誘惑された。それが露見して歌劇団から放逐されたころ、胸のわずらいはそうとう重いものになっていた。しかも、ユキははたらきつづけなければならなかった。
「信ちゃん、そんなところにねてると風邪ひくわよ。ここ少し涼しすぎるんじゃない？」
まっこうから陽にさらされて坂を登るとき汗が肌をつたうのだが、一歩日蔭へはいると汗がひえて悪寒をおぼえる。はたして男はたてつづけに二三度くさめをした。
「ほら、いわないこっちゃないわ」
「それがどうしたというんだ」
つっけんどんにいい放ち、男はそのまま、まじまじと梢越しに空を見ている。赤松の枝ごしにみえる空は抜けるように青くて、魂がすいこまれていくようである。
女は無言のまま男の横顔を見ていたが、ふっさりと睫毛をふせると、
「信ちゃん、いやならここで別れてもいいのよ。そのかわりおクスリおいてって」
「だれがいやだといったんだい？」

「でも、なんだか悪くって」
「それがいやなんだ。そういう気のつかいかたが気にくわねえ。なにさ、もうすぐオダブツだというのに風邪ひくもねえもんだ」
「ごめんなさい、じゃ、もういわないわ」
そういうこまかい世話女房じみた気のつかいようが、とかく男にうるさがられるのだとしりながら、つい出てしまう性分なのだ。そういう性分がわざわいして舞台でも成功しなかったし、体を売るしょうばいにおちてからも男からあまりよろこばれなかった。顔はたしかに小ぎれいにととのっているのだが、遊んでみておもしろくないらしい。男に里心をおこさせるなにものかを持っているらしいのである。
田代信吉は芸大作曲科の学生で、おやじは大阪で歯科医をしている。よくはやる歯科医で自宅の診療室のほかに出張所を二軒もっている。その二軒にそれぞれ二号と三号をおいてあり、ふたりとも技工士に養成してあった。妾をもってもただ遊ばせておかないというのがこのがめついおやじのご自慢で、信吉は子どものころからこの父になじめなかった。
母はもうすこしましな家から嫁にきていて（信吉の眼からみれば）嫁入り道具にピアノをもってきた。アブライトではあるがスタインウェイであった。信吉は三人兄弟の末っ児にうまれたが、かれだけが母の血をひいていたとみえて、幼時から母の嫁入り道具のピアノになじんだ。父の無理解にもかかわらず、作曲家になりたいという信吉の希望がいれられたのは、母のとりなしによるところである。
芸大音楽部のせまき門を現役からパスしたころの信吉はそうとう得意であった。しかし、まもなくカベにつきあたった。絶望のおもいは帰省するたびにふかくなるようだった。母がよわいので精力家の父は毎晩ふたつの出張所のどちらかへいって泊まった。たまに家にいても信吉の相談相手になれる父ではなかった。金のことはあまりいわなかったが、ふたりの兄にくらべるとかかり過ぎると思っているにちがいなかった。
母が生きているうちはまだよかった。その母が去年胃ガンで亡くなるに及んで信吉の運命がくるいはじめた。父は百ヵ日もたたぬうちに後添いを家へいれた。思いがけなくその後添いは、以前から父と関係のあった技工士のどちらでもなく、小金をもった未亡人で小まちゃくれた女の子がいっしょだった。父はこの未亡人との関係をよほどうまくかくしていたらしい。
当然、父とふたりの兄のあいだに争いがたえなかった。父とふたりの愛人とのあいだにも深刻な抗争がつづいているらしかった。東京にいる信吉はこの争いからはのがれられたが、そのかわりいままでどおりの仕送りを期待することは無理だった。
キャバレーやナイト・クラブでピアノをたたく時間がしだいに多くなり、やがて信吉は心身ともに疲れ、かつ

すさんだ。去年の秋、信吉はバンド仲間にそそのかされて、コール・ガールというのをよんで遊んだ。やってきたのが小宮ユキだった。肉のうすいユキのからだを抱いて信吉は童貞をうしなった。それは自己嫌悪以外のなにものでもなく、その晩、信吉はとつぜん兇暴な発作におそわれた。

信吉は三日にあげずユキとあそんだ。ユキは男になにをされてもイイダクダクであった。信吉は女にたいしてますます兇暴になっていった。信吉はもうほとんど学校へいかなくなった。ユキを抱くためにアルバイトに狂奔しなければならなかった。男はいよいよ兇暴になり、女の胸はいよいよ薄くなっていった。

坂のうえからとつぜんはなやかな男女の声と、辷るようにおりてくる足音がきこえた。ユキはあわててカーディガンをひっかけた。

白い露頭をあらわした崖をまわって三人の男女があらわれた。小鳥のようにはしゃぎながら、せまい路をすべりおりてきた三人は、ユキと信吉に気がつくといっしゅん黙って足音もしずかになった。足音が坂のしたへ消えていくまで、ユキは背筋にいたいほどの視線をかんじていた。

「信ちゃん。もういかない？　まただれかくるといやだもん」

信吉は草の底からうごかなかった。眼をとじていた。眼をとじていると頬のこけかげんがいたいたしいばかりである。頭上の木の葉の色をうつして、顔が緑色にみえるのも無気味であった。

「そうそう、おれゆうべ妙な男にあったぜ」

信吉はとつぜん眼をひらいてユキのほうへ首をねじむけた。残忍なわらいをおびた眼つきだった。

「妙な男って？」

「おれ、ゆうべドッグ・ハウスへ泊まってた」

「ドッグ・ハウスってなに？」

「読んで字のごとしさ。犬小屋とそっくりおなじつくりのけっこうなホテルさ。あれでも、男と女が抱きあってねるにゃ不自由はねえだろう。なかは三じょうくらいの広さはあるかな。そんな小屋が林ンなかの空地に三十くらい並んでて、けっこうどの小屋もおれみたいなお客さんで満員だったぜ」

「まあ、あんたの泊まってた白樺キャンプってそんなとこだったの？」

「白樺キャンプ第十八号ハウスといやアごたいそうだが、ま、そんなとこだ。そこで君のくるのを三日待った」

「すみません。くるのがおそくなっちゃって」

「まあ、それゃいいが、その妙な男だがね」

「ええ」

「ゆうべおれのとなりの第十七号ハウスというのへ泊まりゃがった。おれ眠れねえもんだから、林の隅のちっちゃな丘のうえにつくねんとすわってお星様をながめて

た。霧が出てたけど霧のすき間からお星様が見えてたのさ。そしたらそいつがやってきた。ウイスキーの瓶をかかえこんですぐ酔っ払ってやぁがんのさ」
「それで……？」
「そいつおれのようすから、なにか嗅ぎつけやぁがったのかもしンねえな。くよくよすんな、いっぱい飲めてえンだ。おれ、うるせえから相手にしなかったけどな、そいつ、かってにやンながらクドクドしゃべってやぁがったけど、なんでもその男ヨメさんにマオトコされたらしいんだ」
「まあ」
「しかもよう、そいつ、それにながいこと気がつかなかったてえンだからいい面の皮じゃねえかよ。あっはっは」
「信ちゃん、そんな話よしましょう」
「まあ、いいじゃないか、もうすこし聞きなよ。そいでそいつがな、眼には眼を、歯には歯をということばもある、じぶんはかならずこの復讐をしてみせる。こんやにでも押しかけてって、きっと眼にもの見せてやると、やに凄んでるかと思うと、またつぎのしゅんかんにゃメソメソと泣き出すんだ。なんでもそのヨメさんてえのが凄いくらいのべっぴんでよう、しかも名前をいやぁ日本人ならだれだってしってるくらいの有名な女だってさ」
「いったいだれ？　その女のひと？」
ユキもちょっと好奇心をしめした。
「いや、さすがにそれやいわなかったが、そういやぁその男ちょっといい男だったぜ。としは四十くらいかな、貴公子然とした男っぷりだったが、それがすっかり尾羽打ち枯らしたってえかっこうでさ。おれ、ああはなりたくねえと思ったよ。貧すれやドンするってえ感じでさ、これじゃヨメさんがほかに男こさえたってむりやねえと思ったもンな。そうそう、そのマオトコの名前、佐助というらしいんだ」
「それでその奥さんてかた、いま、この軽井沢にいらっしゃるのね」
「うん、そうらしい。情夫ってやつもね。そうそう、そいでそいつ、やに古風なことといってたぜ」
「古風なことって？」
「七人の子をなすとも女に心を許すなってさ」
「信ちゃん！」
ユキは鋭くいい、さぐるように男の横顔をみていたが、急に肩をすぼめると、
「もういきましょう。なんだかお天気がかわりそうよ」
女のいうとおりであった。どこかで遠雷の音がきこえたかと思うと、いままであんなに晴れていた空に、おそろしい勢いで雲がひろがりはじめていた。
男はそれでもまだ寝ころんだまま頭上にひろがりいく速い雲脚を視つめていたが、急になにかをふり落すようにビョコンと起きなおると、
「まあ、いいや、おれのしったことか」

「信ちゃん、なにか気になることがあって？」
「ううん、いいんだ、いいんだ。世のなかにゃいろんなことがあるってことさ。そいつ妙な方程式のこといってたけどな。そいつがおれの心にひっかかるんだが……だけど、まあ、いいさ、おれのしったことか。さあ、いこう」
それから半時間ちかく男はおこったように口もきかず、さっさと女のまえに立ってけわしい坂をのぼりつづけた。女もあえぎあえぎ男のあとを追っていった。
遠雷はもうやんでいたけれど、空はすっかり灰色の雲におおわれて、どこから湧きだしてくるのか薄白い霧がふたりをくるみはじめた。
離山のてっぺんちかくまできたとき、ふたりはうえからおりてくる妙な男に出あった。
その男は白ガスリの単衣のしたから涼しそうな薄浅葱の襦袢の襟をのぞかせ、蟬の羽根のように光る褐色の袴をはいていた。袴の裾にはいっぱい草の実がまぶれついている。頭にのっけたお釜帽の下から、しぜんにカールしたらしい蓬髪が油っ気もなく、雀の巣のようにはみだしていた。埃をかぶった白い夏足袋に、茶色の鼻緒をすげた草履をはいていた。
男はすれちがいざまとがめるように、
「いまから登るんですか」
と、声をかけた。
信吉はさげすむような眼であいてを見たが、返事もせず、肩をゆすって女のほうを振りかえった。
「ユキ、いこう、もうひといきだ」
ユキは妙な男に目礼して信吉のあとを追った。
お釜帽の男はしばらくふたりのうしろ姿を見送っていたが、やがてけわしい路をくだりはじめた。なんとなく重い足どりであった。ときどき気になるように立ちどまっては坂のうえをふりかえった。霧はますますはげしくなり、お釜帽の男の帽子や襟足をじっとりとぬらした。
五分ほどくだってきてからお釜帽の男は立ちどまって、路傍に露出している大きな石に腰をおろした。袂からタバコをだして火をつけた。お釜帽の男はべつにタバコが吸いたくなったわけではない。なんとなくいま登っていったふたりづれが気になるのだ。坂のうえを注視しているが霧は濃くなるばかりである。離山のてっぺんまで登ったところでなにも見えはしないのだ。
お釜帽の男は一本のタバコを吸いおわると、すぐ二本目に火をつけた。しかし、その二本目を半分も吸いおわらぬうちに、ポイと投げすてると、いまきた路を登りはじめた。
乳灰色の霧がお釜帽の男のまわりに渦をまいて、もう数メートルさきとは見わけかねる。お釜帽の男は、ときどき立ちどまり、息をいれながらうえからおりてくるかもしれない足音に耳をすました。しかし、いっこうその気配がないのをしると、また足をはやめた。
さっきふたりづれとすれちがってから二十分ののち、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co